



▲① アングロアメリカの地形(Diercke Weltatlas 2008, ほか)



▲② 急峻な山が連なるロッキー山脈とバンフ国立公園(カナダ、2014年撮影) カナダで最初に設立された国立公園である。

### ●南北と東西で異なる自然環境

アングロアメリカは、北アメリカ大陸のうちアメリカ合衆国とカナダを含む広大な地域である。大陸の西側を南北にはしる急峻なロッキー山脈は、環太平洋造山帶の一部である。<sup>きゅうとうせんたい</sup>  
<sup>(→ p.34)</sup>一方、東側のア巴拉チア山脈は比較的なだらかで、古期造山帶に属する。<sup>(→ p.28 ②)</sup>これらの山脈の間には、北アメリカ大陸最長のミシシッピ川が中央平原を流れ、<sup>(5969km)</sup>メキシコ湾に注いでいる。ミシシッピ川の西側には、プレーリー<sup>①</sup>や  
グレートプレーンズ<sup>②</sup>とよばれる草原が広がる。また、北部には五大湖など、氷河の影響を受けた地形が各地にみられる。<sup>(→ p.42)</sup>

気候は、西経 100 度付近を境として東西で大きく異なり、東側には湿潤地域、<sup>しつじょん</sup> 西側には乾燥地域が広がる。一方、南北の気候の差も大きく、北極圏の近くではツンドラ気候がみられる。その南から五大湖にかけてはタイガの広がる亜寒帯湿潤気候で、冬にはしばしば<sup>(→ p.68)</sup> ブリザードに襲われる。アメリカ合衆国の大西洋岸からメキシコ湾にかけては温暖湿潤気候が卓越し、フロリダ半島の一部には熱帯モンスーン気候の地域もある。この地域は夏にはハリケーンに襲われて大規模な被害を受けることもある。<sup>(→ p.66)</sup> 中央平原では、年降水量は東から西に向かって減少し、植生は森林から草原へと変化する。アメリカ合衆国の南西部には砂漠<sup>さばく</sup> もみられる。太平洋岸では、偏西風や海流の影響を受け、地中海性気候や西岸海洋性気候となっている。<sup>(→ p.52)</sup>  
<sup>(→ p.55)</sup>

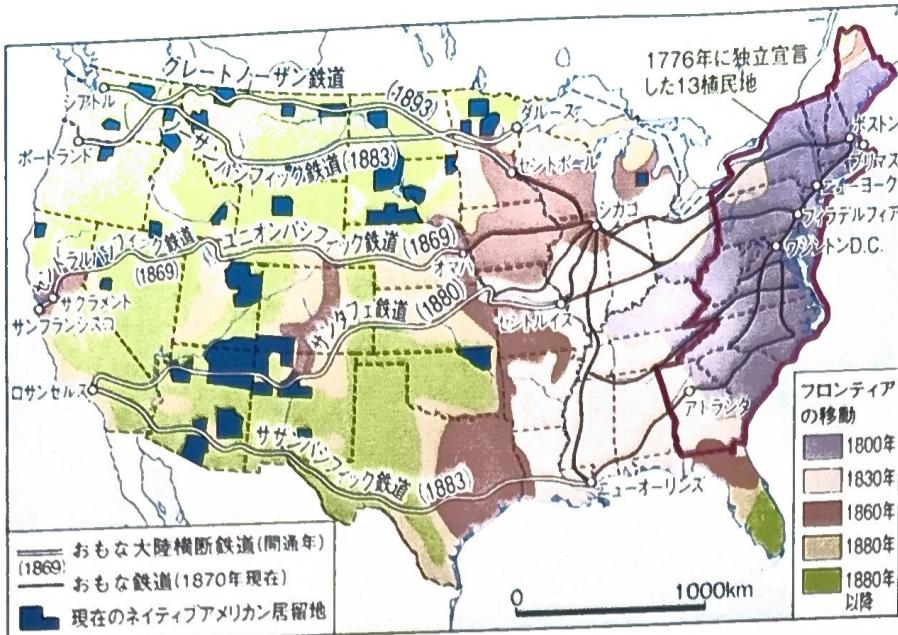
## 用語解説

- ① プレーリー** メキシコ湾岸からカナダにかけて、北アメリカの中央部に広がる大草原。黒色の肥沃な土壤(プレーリー土)に恵まれる。開拓の結果、穀物を中心とした生産性の高い農業地域が形成された。

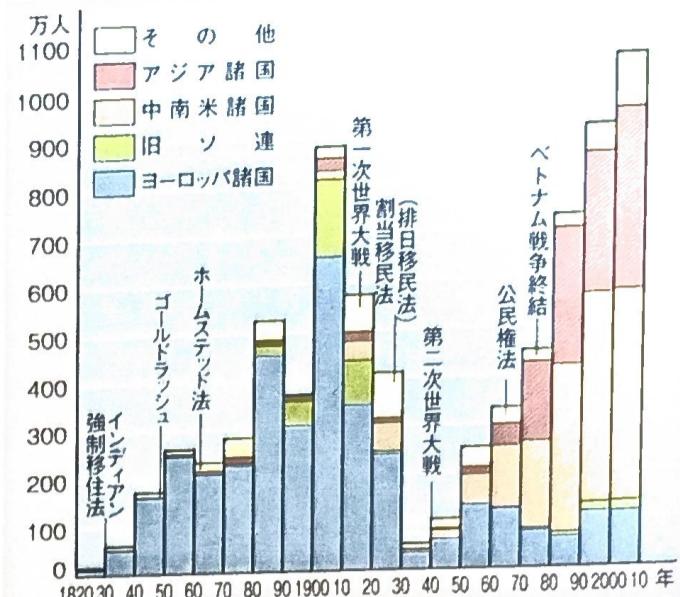
**② グレートプレーンズ** ロッキー山脈の東に南北に広がる台地状の大平原。標高は1800mから600mで、東に向かってゆるやかに低下する。気候は一般にステップ気候で、年降水量は500mm未満であり、たけの短い草が優越する。

#### ① 地吹雪を伴った低温の強風。

② ここでは、トルネードとよばれる大きな竜巻が起きて、住宅を破壊するなどの被害をもたらすことも多い。



▲① フロンティアの移動(Diercke International Atlas 2010, ほか)



▲② アメリカ合衆国の出身地別移民数の変化(Statistical Abstract of the United States 2012, ほか)

## リード

図④や図⑤のようにさまざま民族が暮らすアメリカ合衆国は、民族のサラダボウルとよばれている。そのような多民族社会が形成されてきた背景をみていく。

### 用語解説

① **ネイティブアメリカン** 北アメリカの先住民のこと。「アメリカインディアン」のほかに「エスキモー」(カナダでは「イヌイット」)なども含まれる。

② **ホームステッド法** 開拓民が5年間定住して開墾にあたつた場合に、連邦政府から160エーカー(約65ha)の公有地を無償で獲得できる制度で、1862年に成立した。

③ **ヒスパニック** スペイン語を話すラテンアメリカ系の移民とその子孫のこと。ラティーノとよばれることもある。人種的には多様な人々が含まれる。アメリカ南西部ではメキシコ系が、フロリダではキューバ系が、ニューヨークではペルトリコ系が多い。

① 17世紀から19世紀にかけて大西洋岸に移住したヨーロッパ系移民が、西方へ開拓地を拡大した。開拓された地域と未開拓の地域との境をフロンティアとよんだ。

## 1 移民国家としてのアメリカ合衆国の発展

### アメリカ合衆国の 発展と移民

南北アメリカ大陸には、もともとネイティブアメリカンがそれぞれの場所の自然環境に適応した生活を営んでいた。17世紀に入ると、北西ヨーロッパからやってきた移民が北アメリカ大陸の大西洋岸に植民地を建設し、アメリカ合衆国の建国と発展の原動力となった。人口増加に伴って開拓民は内陸へ向かい、荒野と接する開拓前線(フロンティア)<sup>frontier</sup>はしだいに西へ移動した。<sup>①</sup>開拓民は土地を獲得し、家族ごとに農場を経営した。連邦政府が実施したタウンシップ制<sup>(→ p.183)</sup>という土地の測量・分割方式によって、東西南北に直交する道路や、方形状の農場が一般的となった。また、土地を無償で開拓民に与えるホームステッド法<sup>Homestead Act</sup><sup>むしょう</sup>に代表されるように、自作農を育成する農業政策が実施された。こうした過程で、開拓者精神(フロンティアスピリット)はアメリカ人の国民性を表す言葉としてよく使われるようになった。その一方で、ネイティブアメリカンは西の不毛な土地へ追いやられた。

アメリカ合衆国の移民の出身地は、世界情勢やアメリカ社会の動向を反映して、時代によって大きく変化してきた。<sup>②</sup>多数派である北西ヨーロッパ系の人々の中でも、ワスプ(WASP: White Anglo-Saxon Protestant)系の人々は、この国の政治・経済・文化の発展に大きな役割を演じた。一方、少数派のなかでは、ヒスパニックやアフリカ系アメリカ人(黒人)が大きな割合を占めている。

1970年代からは、アジアやラテンアメリカからの移民が増加した。昔も今も、よりよい生活と自由を求めて、そしてアメリカンドリームを実現するために、この国に移住を希望する人は多い。

## ●ヒスパニックとアジア系移民の増加

ヒスパニックは、農業の季節労働やサービス業・建設労働など、低賃金の単純労働に従事してアメリカ経済を支えてきた。最近では、専門・熟練職に就く人々も増えている。ヒスパニックの増加に伴って、ラテンアメリカ風の生活や文化も広まっている。一方、アジア系移民が増加したのは、移民法が1960年代に改正され、それまでのアジアからの移民制限が大幅に緩和された結果である。近年ではヨーロッパ系移民が減っているため、ヒスパニックとアジア系移民は今後のアメリカ社会に影響を与える重要な存在となっている。



▲③ セロリの収穫作業にたずさわるヒスパニック(フロリダ州、2014年撮影)



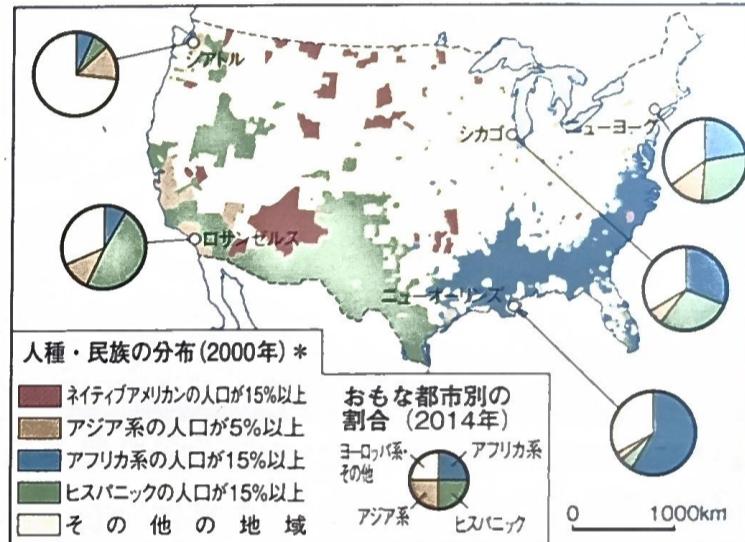
### 地域によって異なる民族構成

アメリカ合衆国では、移民の流入経過や国内の人口移動を反映して、地域により住民の構成が異なる。<sup>▶④</sup>ヨーロッパ系の人々は国土の全域に住んでいる。アフリカ系の人々は南部に集中しているが、ここでは、19世紀中ごろまで、アフリカ系奴隸に依存したプランテーション農業が行われた。<sup>(→ p.101)</sup> 20世紀に入ると、彼らのなかには、労働力の不足した北部の工業都市に移動したり、第二次世界大戦中の軍需産業の発展に伴って、太平洋岸の都市に移動したりする人々が現れた。ヒスパニックは、メキシコと国境を接する南西部や、カリブ海諸国に近いフロリダ半島に集中する。一方、太平洋岸は環太平洋地域の一部としてアジア諸国と密接な関係をもっており、大都市には中国・韓国・フィリピン・インドなどからの移民が集中している。

15

### 多民族社会の課題

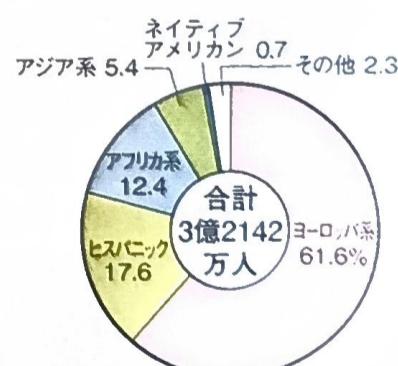
アメリカ合衆国では、移民を積極的に受け入れながらも、少数派集団に対する偏見や差別が存在し、摩擦や対立が繰り返されてきた。とくに、アフリカ系の人々に対しては根強い差別が存在したが、1960年代の公民権運動の結果、法律のうえでは平等な権利が保障されるようになり、所得や教育の格差を是正するための努力も行われてきた。最近では、アメリカ合衆国社会を構成する多様な集団が、たがいの文化的な伝統を尊重し合いながら共生しようとする意識が強まっており、このような多民族社会はサラダボウルにたとえられる。2009年には、初めてアフリカ系の大統領が誕生した。多民族がどのようにして共生していくかは、この国にとって大きな課題である。



▲④ 人種・民族の分布と都市の人口構成(U.S. Census)

\*複数の条件にあてはまる場合、アメリカ合衆国における総人口が少ないネイティブアメリカン、アジア系、アフリカ系、ヒスパニックの順に優先させ、地図を着色している。

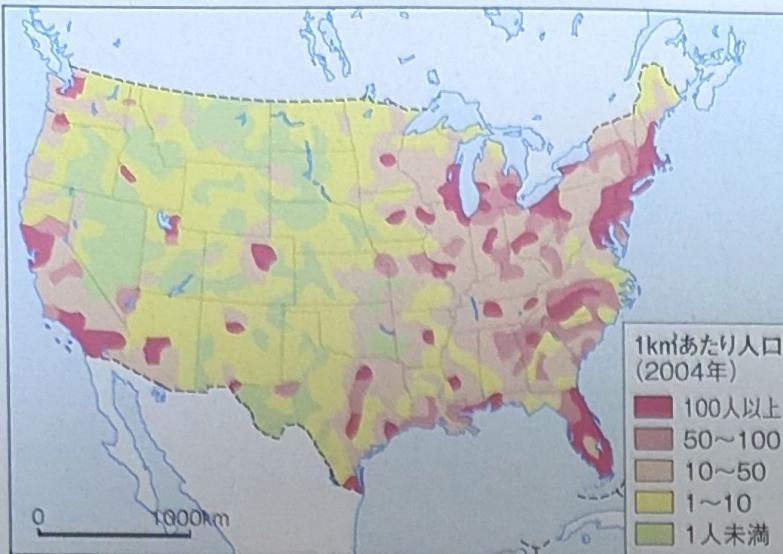
読図 ヒスパニック、アフリカ系、アジア系の割合が高い地域はどこだろうか。



▲⑤ アメリカ合衆国の人種・民族構成(2015年)(U.S. Census)

### チェック

アメリカ合衆国の移民の出身地は、時代によってどのように変化してきたか、説明しよう。



▲① アメリカ合衆国の人団密度(左)とメガロポリス(上)  
(The TIMES COMPREHENSIVE ATLAS of the WORLD, ほか) 読図 人口 50 万以上の都市の連なりに着目しよう。



▲② 高速道路沿いのショッピングセンター(ヒューストン, 2014 年撮影)



▲③ ロサンゼルスの人種・民族の住み分けとショッピングセンターの分布(Diercke Weltatlas 2008, ほか)

## リード

図①のようにアメリカ合衆国の人団の大部分は都市に集中している。図③や図⑤のようなアメリカ合衆国の都市の構造とその変化、問題点をみていく。

## リンク

先進国の都市・居住問題(p.195)



▲④ ニューヨークのチャイナタウン(2012 年撮影)

## 2 アメリカ合衆国の人団と都市

### 人口と 都市の分布

アメリカ合衆国は、世界第3位の人口をもつ国で

あるが、国土が広いため国全体の人口密度は低い。

都市と人口の分布には、自然条件や歴史的背景を反映して著しい地域差があり、人口の大部分は都市に集中する。地域別にみると、都市と人口は国土の東半分に多く分布し、とくに大西洋岸のボストン

からワシントン D.C. にかけての地域は、メガロポリスとよばれる  
The District of Columbia (p.188)

人口集中地域となっている。また、五大湖沿岸、ミシシッピ川・オハイオ川に沿った地域や、太平洋沿岸部にも都市と人口が集中する。

一方、内陸の農業地域には小規模な都市が点在している。

### 都市構造の 変化

さまざまな業務機能が集中する都心部(CBD)の

(p.190)

周辺には、かつては工場が立地し、その外側に労働者

の住宅地が存在した。都市は流入する移民の受け皿となり、家賃の低い住宅地には移民の街が形成された。アメリカ合衆国の人々はよく引っ越しをすることで知られる。その結果、都市では人種・民族や所得による住み分けが進行し、地区ごとに住民の属性が異なる

10

15



▲⑥ 高層ビルが林立するマンハッタン(ニューヨーク, 2013年撮影)

◀⑤ ニューヨークの都市機能と移民街(Diercke Weltatlas 2008)

という都市構造が形成された。

**モータリゼーション(車社会化)<sup>1</sup>** (motorization) が進行し、産業構造が変化すると、

都心とその周辺部は衰退し、都市のさまざまな機能の中心は郊外に移った。今日、郊外のビジネスセンターや工業団地は多様な企業活動の場であり、同じく郊外の大型ショッピングセンターは、消費や人々の交流の中心となっている。そのため、郊外の住宅地に住む中産階層の人々にとって、都心部との結びつきは弱まっている。とくにロサンゼルスは、このような郊外化の著しい都市圏である。

(→ p.188)

### 大都市が抱える課題

多くの都市機能が郊外に移転した結果、都心周辺部ではインナーシティ問題<sup>2</sup>が深刻化した。例えば、

(→ p.195)

自動車産業の世界的な中心地として知られたデトロイトでは、自動車産業の不振によって地域の経済が大きな打撃を受けて市の財政が破綻<sup>3</sup>し、失業率の上昇、生活環境の悪化、教育の荒廃などの問題が深刻化した。衰退した都心とその周辺部では、公的な資金や民間資本が投入されて再開発事業が行われているが、地域と経済が再生するまでには、今なお多くの課題が存在する。

また、移民の流入に伴い、多くの移民街が形成されたニューヨークでは、20世紀に入ってアフリカ系の貧しい人々の居住地区として知られるようになったハーレム地区で、生活環境の悪化や多発する犯罪が問題となった。最近では、再開発事業が進んで生活環境も改善されている。一方、郊外には新しく流入した移民たちによって、新しい移民街が形成され始めている。

### 用語解説

**1 モータリゼーション(車社会化)** 自動車が一般の人々の間に普及することによって、自動車に依存した生活と社会が進行すること。アメリカ合衆国では、T型フォード(→ p.136 写真⑪)の普及に伴って、1920年代にモータリゼーションが始まった。



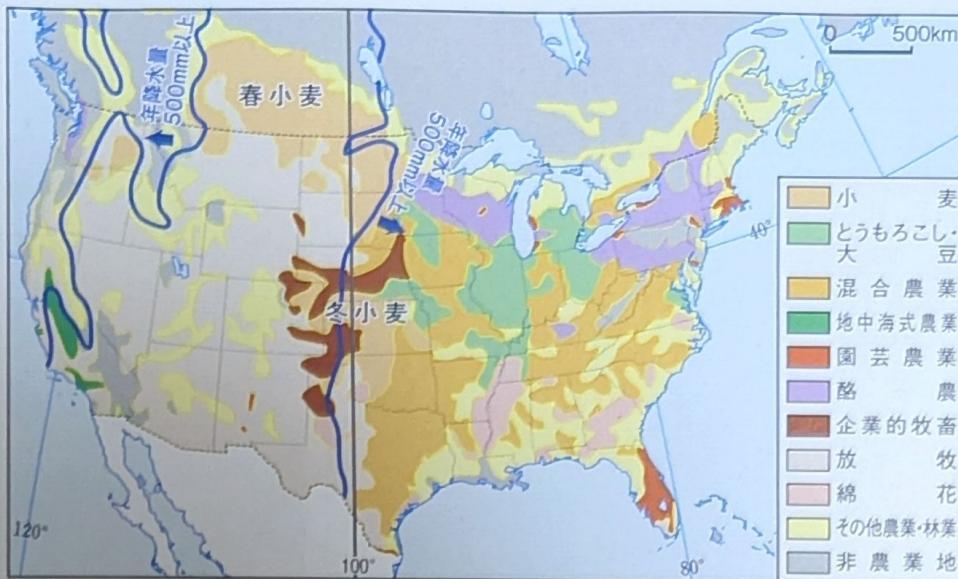
▲⑦ 失業者の雇用を求めるデモ(デトロイト, 2011年撮影)

デトロイトでは、失業者が大幅に増え、都市の荒廃が進んだ。

### チェック

モータリゼーションの進行により、アメリカ合衆国の大都市にはどのような変化が生じたか、説明しよう。

	アメリカ合衆国	カナダ	日本	フランス
耕地1haあたりの肥料消費量	128.9 kg	67.3	241.9	129.8
耕地1haあたりの穀物収量	5925 kg	3625	6134	7524
農民1人あたり穀物収量	148.1t	160.8	9.4	135.7
農民1人あたり耕地面積	65.4 ha	157.6	3.7	36.9



▲① 農業生産性の比較(2012年)〈FAOSTAT〉

読図 アメリカ合衆国の農業の特色を他の国と比較して考えよう。

▲② アングロアメリカの農業地域(Goode's World Atlas 2010, ほか)

読図 年降水量500mmの線を境とする農業地域の変化に着目しよう。

## リード

世界の食料庫とよばれ、図②のようにさまざまな作物が生産されるアメリカ合衆国の農業にはどのような特色と課題があるか、とらえていこう。

## リンク→

新大陸で発達した企業的農業(p.100)  
グローバル化のなかの世界の農業(p.103)



▲③ おもな農産物の総輸出に占めるアメリカ合衆国の割合(2013年)〈FAOSTAT〉

## 3 世界の農業のかぎをにぎるアメリカ合衆国

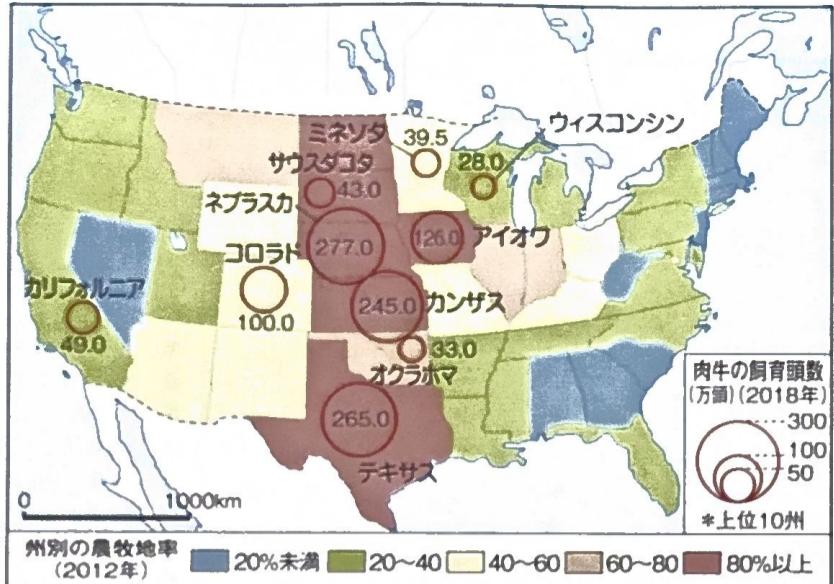
### 合理的な農業経営

広大な国土をもつアメリカ合衆国では、家族経営の小規模な農場によって開拓が進行する過程で、それぞれの地域の自然環境に適応した農業が発達した。また、少数の農業従事者が広大な農地を耕作するため、経営の大規模化、機械の大型化・高度化、化学肥料や農薬の投入、情報技術の利用による農業経営の合理化など「農業の工業化」が進んだ。その結果、アメリカ合衆国は世界有数の農業国となり、今日、多様な農産物が大量に生産されている。とくに穀物の輸出はさかんで、アメリカ合衆国は「世界の食料庫」とよばれている。また、この国で発達した農業方法は、機械化や科学技術の活用を含めて、世界中に影響を与えている。

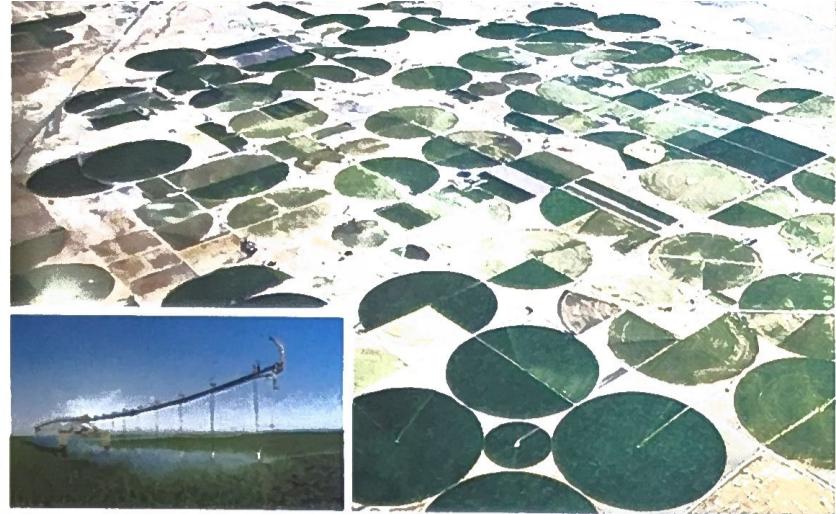
### 地域によって異なる農業

アメリカ合衆国の中でも、西ヨーロッパから導入された混合農業に飼料作物のとうもろこしが組み込まれて形成された。この混合農業は、それぞれの地域の自然条件などを反映して変形され、適地適作とよばれる多様性をつくり出した。北東部の大西洋岸では、大都市への近接性を生かして、近郊農業が行われてきた。オハイオ州の西部からアイオワ州にかけての比較的湿潤な地域は、コーンベルトとよばれ、とうもろこしや大豆を中心とした飼料作物の輪作と、家畜(牛や豚)の飼育を組み合わせた農業が行われてきた。気候の冷涼な北東部から五大湖周辺地域にかけては、牧草の栽培と酪農がさかんである。

西側の雨の比較的少ない地域では、比較的乾燥に強い小麦が大規模に生産されている。プレーリーからグレートプレーンズにかけての地域は、世界有数の穀倉地帯である。南部では、歴史的に綿花栽培



▲④ 州別の農牧地率と肉牛の飼育頭数(USDA 資料、ほか)



▲⑤ センターピボット方式による大規模な灌漑(ユタ州)

地下水をくみ上げて、周回するスプリンクラーを使って灌漑するため、乾燥地域でも大規模に作物を栽培することができる。

が重要だったが、農業の多様化が進んでいる。地中海性気候のカリフォルニア州では、気候が温暖で作物を栽培できる期間が長いため、果樹や野菜などの集約的な農業(地中海式農業)がさかんである。  
(→ p.99)

### 資本と技術の役割

広い農地を少ない農業人口で経営するために、アメリカ合衆国では新しい農業技術の開発がさかんである。グレートプレーンズの豊富な地下水を利用できる地域では、大規模灌漑によって、新しいとうもろこし地帯が形成された。フィードロットとよばれる企業的な肥育場では、地元のとうもろこしを飼料として、肉牛が大規模に肥育されている。この肉牛は大規模食肉工場で冷凍牛肉に加工され、海外にも輸出される。大きな資本をもつアグリビジネス企業は、このような食肉産業を支える存在である。とうもろこしは飼料やバイオエタノールの原料など多目的に利用されており、世界一の生産量を誇る。そのため、干ばつなどによる生産量の変動は、世界の穀物価格に大きな影響を与える。

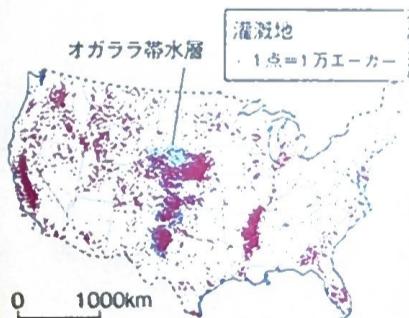
### 先進的な農業とその問題点

大きな資本をもつアグリビジネス企業は、世界の食料供給に多大な影響を与えていている。これらの多くは、アメリカ合衆国に本拠地をもつ多国籍企業で、世界各地で農業関連のさまざまな事業を展開している。なかでも巨大穀物商社(穀物メジャー)は、世界の穀物の価格を左右する存在であり、穀物の流通・加工、食肉産業などにも進出している。一方、多くの農産物を海外に輸出するアメリカ合衆国では、農家は国際的な政治・経済状況の影響を直接受ける。農産物の価格が低迷したときには、家族経営の農家は倒産や離農に追い込まれてきた。農業の大規模化・企業化が進んだ結果、昔からの土地利用や土壤管理が行われなくなったり、土壤侵食や農地の荒廃などの問題に直面している地域もある。

### プラスα

#### オガララ帯水層の減少

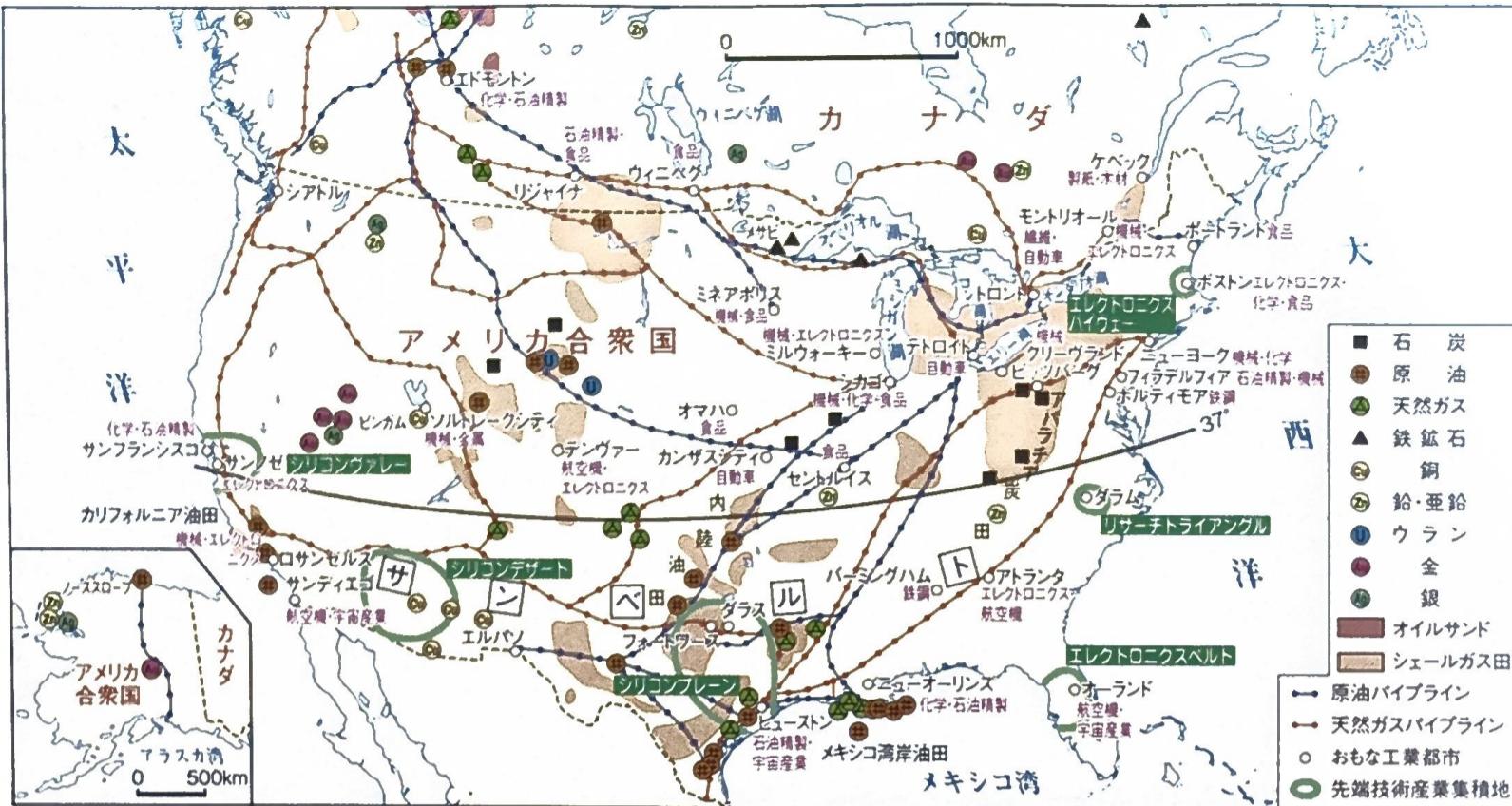
グレートプレーンズの中央部には、オガララ帯水層とよばれる、日本の国土面積の約1.2倍にも及ぶ巨大な地下水資源が存在する。この地下水を用い、センターピボット方式による大規模な灌漑農業が発展した。しかし、オガララ帯水層は数千年をかけて蓄えられた地下水であるため、地下水位の低下と将来的な枯渇が心配されている。カンザス州やテキサス州では、1980年からの十数年間で地下水位が10m以上も低下したところがみられた。そのため、各地に地下水管理地区が組織され、限りある地下水資源を有効に利用する努力が行われている。



▲⑥ アメリカ合衆国の灌漑地とオガララ帯水層(USGS 資料、ほか)

### チェック

アメリカ合衆国の農業地域区分を、自然条件との関連から説明しよう。



▲① アメリカ合衆国とカナダ南部の鉱工業(Diercke Weltatlas 2008, ほか) 読図 北緯37度以南の地域にはどのような工業が多く分布しているだろうか。

#### リード

図①のようにアメリカ合衆国で先端技術産業が発達するようになった背景を、工業の歴史をたどりながらとらえていこう。

#### リンク→

先進国の工業化(p.140)  
国際分業の進展(p.144)

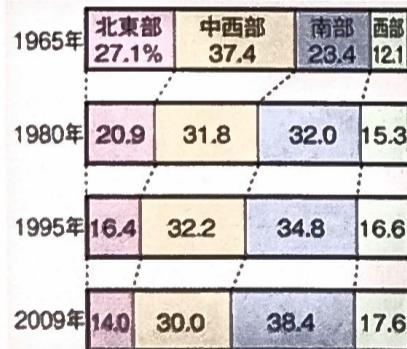
## 4 進展する科学技術と産業

### 世界をリードする工業国

アメリカ合衆国は、20世紀に世界最大の工業国に発展した。その原動力となったのは、豊かな鉱産資源の存在、資本の蓄積、移民労働力の流入、自由な発想と技術革新であった。合理的な大量生産方式が確立され、新しい工業分野が開拓された。第二次世界大戦後には、エレクトロニクス、航空宇宙産業、バイオテクノロジーなど、各種の先端技術産業が発達した。コンピュータやインターネットなど、情報化社会を実現する新しいICT産業の多くもこの国で開発された。研究機関や企業では、多くの人々が研究開発に取り組んでいる。

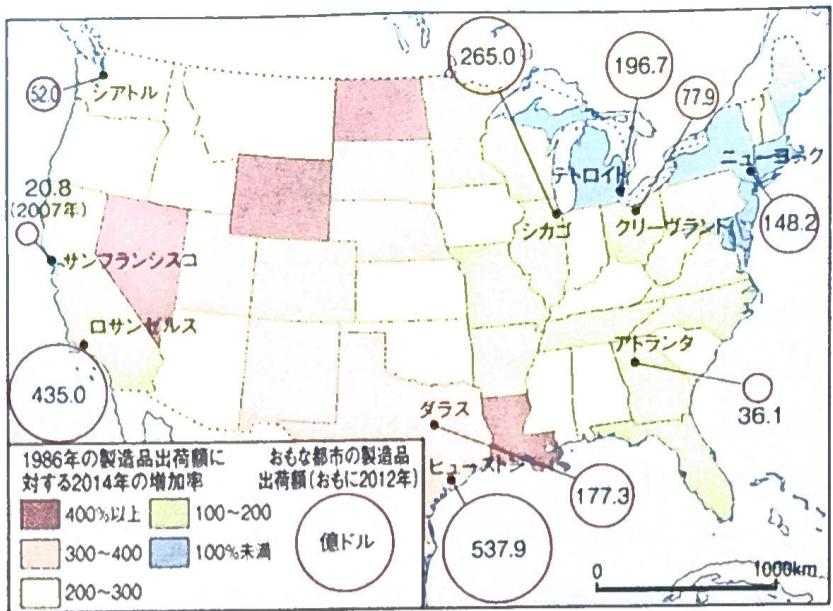
### 国際競争と産業構造の変化

大西洋岸のメガロポリスから五大湖沿岸にかけての地域は、20世紀前半まで、重工業を中心とした経済発展の舞台であった。メサビなどの鉄鉱石とア巴拉チア炭田の石炭など、豊富なエネルギー・鉱産資源が水運で結びつけられ、国内最大の工業地域が形成された。オハイオ川上流部のピッツバーグは「アメリカのバーミンガム」とよばれ、19世紀から20世紀前半にかけて、鉄鋼業の中心地として繁栄した。鉄鋼は工業発展の原動力であり、鉄道交通の発達や自動車産業の基盤となった。デトロイトは自動車産業の中心地として代表的な工業都市となり、世界有数の自動車メーカーが本拠をおいた。また、油田開発により自動車燃料のガソリンが確保されたこと、さらに、移民の労働力や



▲② アメリカ合衆国の地域別工業生産額の変化(Statistical Abstract of the United States 2012, ほか) 読図 工業の中心はどこからどこに移ってきただろうか。

① バーミンガムはイギリスのミッドランド工業地域を代表する工業都市で、産業革命と工業化を象徴する都市として発展した。ピッツバーグはアメリカ合衆国を代表する工業都市であるため、このようによばれた。



すぐれた技術、巨大な資本に恵まれたことも工業発展の要因となった。

しかし、第二次世界大戦後、ヨーロッパや日本で工業化が進むと、これまでこの国の経済を支えてきた鉄鋼業や自動車産業は、厳しい国際競争にさらされた。技術革新や品質管理の遅れ、労働者の高い賃金、ドル高による国際競争力の低下などもあいまって、この伝統的な工業地域では、工場が閉鎖され、失業者が増大した。この地域はスノーベルト(フロストベルト)  
Snowbelt Frostbeltとよばれ、産業構造の変化を象徴する存在となった。また、こうした産業構造の変化を受けて、多くの製造業の企業は賃金の安いメキシコなどへ工場を移転し、多国籍化した。その結果、国内では雇用が減少し、**産業の空洞化**が問題となつた。しかし近年では、経済の復活がみられる地域もある。ピツバーグは、都市の再開発事業によって、先端技術産業を基盤とした工業都市へと変化しつつある。また、ニューアイオワ州にも、新しいICT産業の集積地が形成されている。

### サンベルトの台頭と新しい産業

北部の伝統的な工業地域で経済が衰退したのに対して、1970年代からは、北緯37度より南側の地域に新しい工業地域が生まれた。サンベルトとよばれるようになったこの地域には、温暖な気候、低賃金で働く労働力、広い工業用地、州政府による誘致制度など、企業にとって魅力的な環境が存在した。こうして、工業の中心は北から南へと移動し始めた。カリフォルニア州のシリコンバレーには、名門大学を拠点として、多くの半導体工場、コンピュータ・ICT関連企業が集中するようになった。アリゾナ州の砂漠<sup>さばく</sup>やテキサス州の平原にも先端技術産業が発展し、シリコンデザート、シリコンプレーンとよばれる。

シリコンバレー

Silicon Valley

Silicon Desert Silicon Plains

② 北部の伝統的な工業地域は、サンベルトと対比して、こうよばれるようになった。ここでは工業が衰退してきたので、ラスト(さびついた)ベルトとよばれることもある。

③ 1970年代の石油危機を契機として、エネルギー経費が少なくてすむ温暖な地域に関心が集まるようになった。

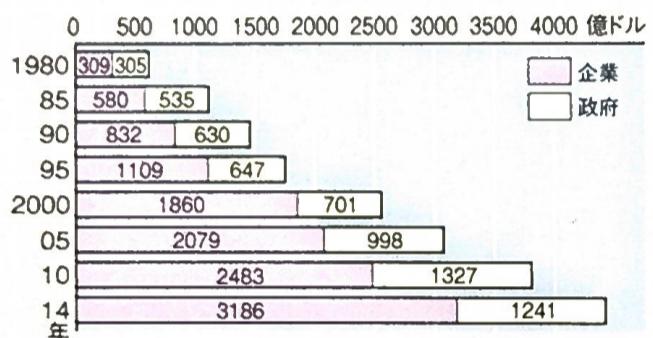
### プラスα

#### 復活をめざす自動車産業

アメリカ合衆国の自動車産業は、1980年代に日本から輸入された低価格の小型自動車との競合によって、大打撃を受けた。もともとアメリカ車は大型で燃料効率が悪かったが、1970年代の石油危機と、その後の日本車との競合を経験したことによって、燃料効率の改善がはかられた。現在では、ガソリンエンジンと電気モーターを組み合わせたハイブリッド車が、環境にやさしい車として人気を得ている。アメリカ合衆国の自動車会社は、国内で生産される日本車に対抗しながら、復活への努力を続けている。



▲①シリコンバレーに本社を構えるICT企業の社員食堂(カリフォルニア州、マウンテンビュー、2014年撮影) 世界各地から人材が集まっており、とくにアジア系の従業員の姿がめだつ。

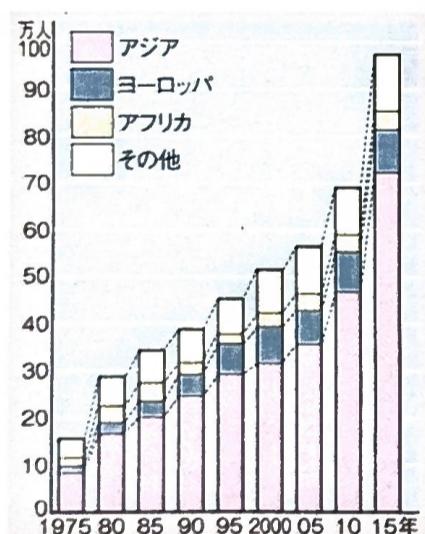


▲②アメリカ合衆国の研究開発への投資額の推移  
(Statistical Abstract of the United States 2018, ほか)

## ●産学協同で発展するシリコンバレー

シリコンバレーは、サンフランシスコ湾の南岸に立地する、サンベルトを代表する先端技術産業地域である。この新しい工業地域の形成と発展には、名門大学として知られるスタンフォード大学や、多くの発明家たちが貢献してきた。1938年にスタンフォード大学の卒業生の2人が、大学の近くの借家のガレージで、オーディオ発振器を開発した。翌年2人が立ち上げた企業は、その後、コンピュータ製造などで世界的に有名になった。

第二次世界大戦中には、太平洋岸では軍需産業が発達し、スタンフォード大学にも軍事開発を目的とした多額の政府研究費が投入された。1950年代に入ると、大学に隣接した土地に工業団地が設置され、産学協同による新たな発展が始まった。まもなく、トランジスター製造の商業化の研究が始まり、これを契機に半導体の製造を中心としたハイテク企業が集積して、シリコンバレーが形成された。ICT産業にとって優れた人材の存在は重要である。大学が育成する人材、そして世界中から集まる頭脳は、ICT産業の中心地としてのシリコンバレーに活力を生み続けている。



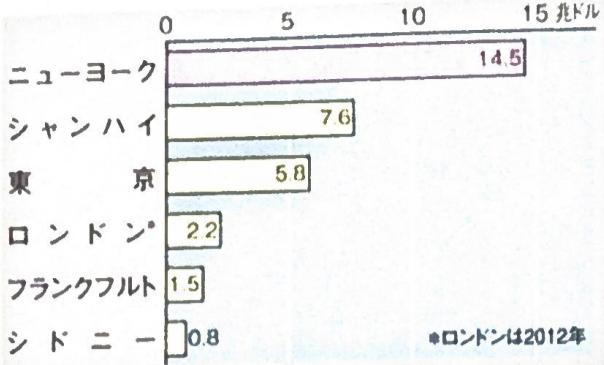
▲③アメリカ合衆国への留学生と出身地(Statistical Abstract of the United States 2018, ほか)

コンピュータやインターネットなどのICT関連企業は、世界市場において圧倒的なシェアを保ち、アジアをはじめ、海外からの人材を積極的に集めている。<sup>①</sup> この国のICTは、コンピュータのCPU、<sup>(→ p.141)</sup> ソフトウェア、検索エンジンなど、事実上の世界標準となっている。

ケンタッキー州やテネシー州では、1980年代後半から1990年代にかけて、比較的人件費が安く、豊富な労働力を背景に、国内や外国の自動車メーカーが進出し、周辺地域の経済活動を活発化している。また、メキシコ湾岸は石油化学工業の中心地であるが、ヒューストンを中心とした地域やフロリダ半島にも、航空宇宙産業やICT産業が集積するようになっていった。これらの先端技術産業もまた、サンベルトを象徴する存在である。生命工学や医療技術などの分野でも、この国の影響力は大きい。特許の取得件数が多いことからも、<sup>(→ p.148 ②)</sup> アメリカ合衆国が先端技術産業において世界を牽引していることがわかる。さらに、資源開発においても、2000年代以降、シェールガスやシェールオイルなどの開発を急速に進め、天然ガス・原油の<sup>(→ p.130)</sup> 生産量を増加させたことで、シェール革命<sup>(→ p.130)</sup> として注目を集めている。

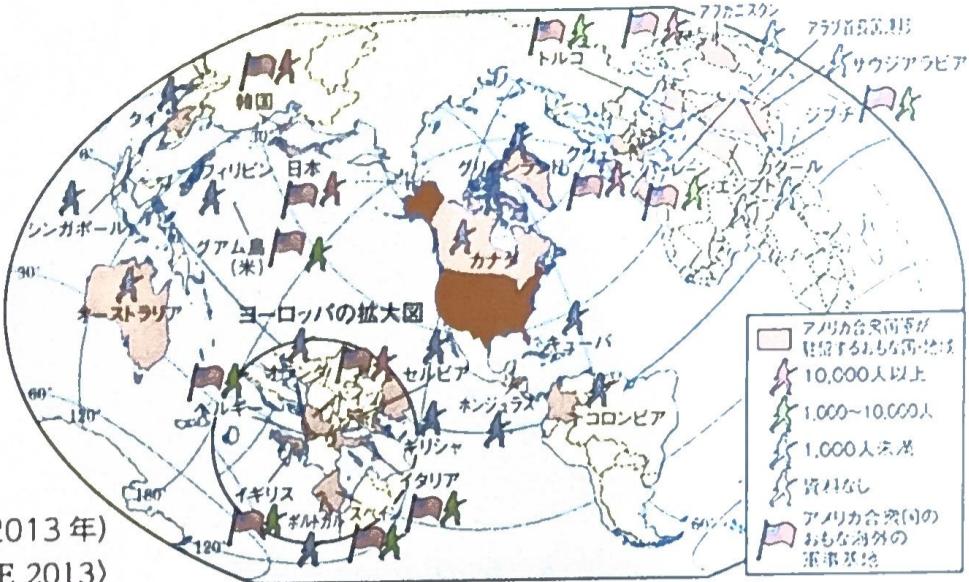
### チェック

- 1) アメリカ合衆国北部の伝統的な工業地域が衰退し、サンベルトが台頭してきた理由を、具体的な工業をあげて説明しよう。
- 2) シリコンバレーが発展した要因を、「産学協同」の語句を用いて説明しよう。



▲④ 世界の証券取引所の取引高(2017年)  
(World Federation of Exchanges)

►⑤ 世界のアメリカ軍基地(2013年)  
(THE MILITARY BALANCE 2013)



## 5 世界の中のアメリカ合衆国

### 国際社会に影響を与える アメリカ合衆国

東西冷戦の終結後、アメリカ合衆国は唯一の超大国となり、経済的にも政治的にも圧倒的な力を世界中に及ぼしている。ドルは世界の基軸通貨として、貿易などの国際取引で広く使用されている。世界都市

ニューヨークは世界の金融業の中心地で、ここにあるウォール街は金融業を象徴する存在である。アメリカ経済の動向は世界経済に影響を及ぼす。この国の大手投資銀行の経営破綻がきっかけで、2008年の世界的な金融危機と経済不況が引き起こされた。

アメリカ合衆国の政治の中心はワシントン D.C. で、ここでは国内の政治ばかりでなく、国際社会を左右する決定も行われる。それは、国連などの国際機関の運営、地域紛争の解決、サミットなどの首脳会議など、さまざまな国際的場面で、この国が大きな発言力をもっているからである。アメリカ軍は、日本を含めて、世界中に駐留している。世界各地での紛争に介入し、世界の警察官とよばれることもある。アメリカ合衆国が国際社会とどのように協調していくかは、この国だけでなく、世界にとって重要な意味をもっている。

### NAFTA 成立による変化

1994年に成立した北米自由貿易協定(NAFTA)

North American Free Trade Agreement

により、アメリカ合衆国を中心とする世界有数の経済圏がつくられた。協定の成立後は、アメリカ合衆国の企業がカナダやメキシコに進出するなど、工業面でも変化がみられる。とくにメキシコには、人件費の安さから自動車、家電製品を中心とする電気機械、繊維工業を中心に多くの工場がつくられ、アメリカ合衆国への輸出が増加している。また、カナダとメキシコにとってはアメリカ合衆国が最大の貿易相手国ではあるが、カナダとメキシコの間の貿易も増えるなど、貿易の活発化による経済効果も現れている。

### リード

図④や図⑤のようにアメリカ合衆国が世界に与える影響と役割を、経済と政治の面から考えていこう。

① マンハッタン島南部に位置し、世界最大規模のニューヨーク証券取引所がある。

② 低所得者向けの住宅ローンであるサブプライムローンが回収不能におちり、巨額の損失を抱えたことで引き起こされた。

### 用語解説

#### ① 北米自由貿易協定(NAFTA)

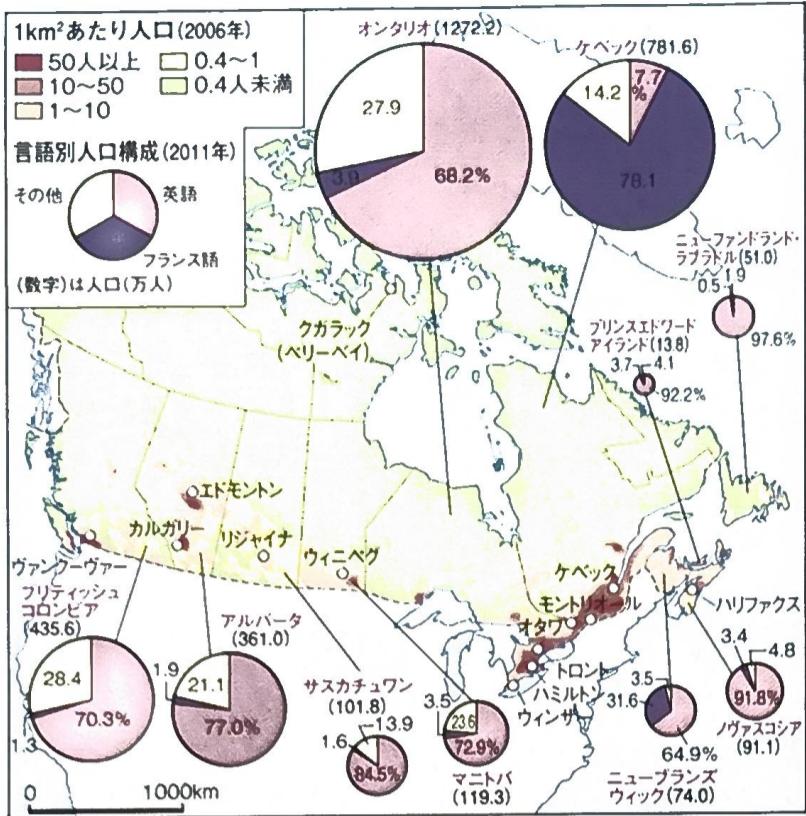
カナダ・アメリカ合衆国・メキシコの3か国で締結した自由貿易協定のこと。1994年に発効した。関税を段階的に撤廃すること、他国への投資を自由化すること、知的財産権を保護することなどにより、経済を発展させることを目的とする。

アメリカ合衆国			合計 1兆4505億ドル
カナダ	15.8	イギリス	その他
18.4%		3.8	49.6
メキシコ		日本 4.4	
		中国 8.0	
カナダ		日本 2.1	3891億ドル
アメリカ合衆国	76.2%	中国 4.1	その他 12.8
		イギリス 3.3	メキシコ 1.5
メキシコ		ドイツ 1.1	3739億ドル
アメリカ合衆国	カナダ 2.8	その他 12.7	
	81.0%	中国 1.4	日本 1.0

▲⑥ NAFTA 各国の輸出相手国  
(2016年)(UN Comtrade)

### チェック

北米自由貿易協定によってどのような経済圏が形成されたか、説明しよう。



▲② オイルサンドの精製施設(カナダ、フォートマクラーレ近郊、2014年撮影)

#### ◀① カナダの人口密度と言語別人口構成 (Statistics Canada, ほか)

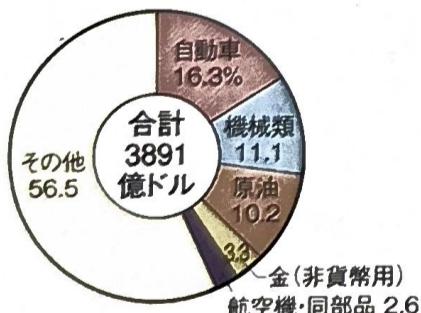
リード

さまざまな面でアメリカ合衆国と結びつきが強いカナダについて、民族・文化と産業の観点からみていく。

リンク→

## 共生に向けた取り組み(p.221)

① カナダは、イギリス連邦に、1931年の発足当時から加盟している。イギリス連邦は、イギリスとその植民地であった独立主権国家で構成される連合組織で、2017年現在、53か国が加盟している。



### ▲③ カナダの輸出品(2016年) (UN Comtrade)

### ✓ チェック

多民族社会といわれるアメリカ合衆国とカナダについて、その成立における歴史的経緯がどのように異なるか、説明しよう。

## 6 アメリカ合衆国との結びつきが強いカナダ

## 複雑な民族構成 と多文化主義

**複雑な民族構成と多文化主義** カナダは、新大陸につくられた国家という点ではアメリカ合衆国と似ているが、異なる歴史的経緯を経て多民族社会を発展させてきた。カナダに最初に入植したのはフランス人であった。しかし、フランスとイギリスが植民地を争った結果、イギリスがカナダを支配下においたため、イギリスとの関係が継続されてきた。<sup>①</sup>一方で、フランス系住民も残ったカナダでは、イギリス系住民とフランス系住民が共存してきた。今日、カナダでは多文化主義がとられ、英語とフランス語とともに公用語となっている。<sup>(→ p.222)</sup>しかし、フランス系住民が約8割を占めるケベック州では、<sup>②</sup><sup>(→ p.216 ①)</sup>分離・独立を求める運動がたびたび起きている。最近では、トロントなどの大都市を中心に、アジアからの移民も増えている。

## アメリカ合衆国と つながりの深い産業

高緯度に位置するカナダでは、アメリカ合衆国との国境に近い、気候の比較的温暖

な南部に、人口と都市が集中する。カナダの社会は、産業と経済においては、アメリカ合衆国と強い結びつきをもっている。カナダの南部では、アメリカ合衆国と同様に、牧畜や春小麦の栽培を中心とする大規模な農業が行われている。また、カナダは森林資源や鉱産資源に恵まれている。(→ p.300 ②) とくに最近では、西部でオイルサンドの開発(→ p.130) が進められており、新しいエネルギー源としての期待が高まっている。五大湖をへだててアメリカ合衆国の工業地域と接する南東部では、工業がさかんであり、アメリカ系企業が集中する。(→ p.302 ①)